

週日の説教

金 大烈 神父 2011年9月13日(火)

《絶望から希望へ ～困難の時、神様に頼り願ひましょう～》

今日の福音(ルカ7:11-17)も皆様がよくご存知の物語です。イエス様が、死んだ人を生き返らせた話です。

この物語を読んでも、なぜこの若者が死んだのかは分かりません。ただ、イエス様がナインという町の門に近づいたところ、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出される場所だった、と説明されているだけです。しかし、その場の様子が想像できます。その場面の絵が、私たちの脳裏に浮かびます。そして次に書かれているのは、その母親がやもめで、大勢の町の人が付き添っている、という説明です。

さあ、想像してみましょう。理由は分かりませんが、夫のいない女性がいます。一人息子を残して、夫は逝ってしまったのです。そしてその息子も死んでしまいました。おそらく、彼女の唯一の頼り、希望、生きる意味は、その一人息子だったのでしょ。その息子が死んでしまい、彼女が感じたのは絶望でしょう。「希望を失う」くらいではなく、「希望が絶えてしまった」のです。何の希望も持つことができないこと、希望が絶えてしまうことを『絶望』と言います。きっと彼女は、そのような心境だったのでしょ。

なぜやもめになったのか、なぜ息子が死んだのかは、全然分かりません。しかし、このような状況の母親ならば、息子が死なないように本当に強く願ったのでしょ。おそらく「あなたは絶対に死んではいけない、いけない。」と言って、泣きながらその死を迎えたのでしょ。それを察したイエス様は、哀れに感じ、棺に手を触れられると「若者よ、起きなさい。」と言います。するとその息子は起き上がり、ものを言い始めます。そしてイエス様は、息子を母親に返したと書かれています。

私は、この福音と同じような体験談を読んだことがあります。私の知り合いに有名な小説家があります。その人も30代で夫をがんで亡くしました。そしてその数か月後に子どもも死んでしまいました。彼女は黙想録のような小説を書き、このように自分の心を表現しています。

「私は、熱心なカトリック信者の家庭に育ち、生きて来ました。どんなことでもイエス様を賛美していました。しかし、夫を失い、あまり時間をおかずに一人息子も失った時、私が最初にしたことは十字架を投げつけることでした。そして、完全に生きる意味を失いました。全てが憎しみに満たされました。どうすればよいのか全く分からず、気が狂ってしまいたいと思うのに、それもできませんでした。全てのものは、ありのまま目に入って来ました。

そんな状況でも、神様は私を手放しはしませんでした。私は、分からない力によって、初めてイエス様の御心を体験しました。私がこのように小説を通して賛美と感謝を語れるのは、言葉では説明できないことです。私にとって、絶望は完璧な希望との出会いになりました。」

私たちは、いろいろなことでがっかりします。そして、もっと深刻になると、本当に希望が切れてしまい、生きる意味さえ分からなくなります。その時、絶対に手放してはいけないのは、『希望』でしょう。そしてその希望は、私たちにとっては、神様の御心でしょう。

今日の福音には書かれていませんが、先ほど申し上げたように、母の心が、イエス様のみ心に通じたのでしょうか。だから哀れに感じ、実際にはイエス様がしてはいけないことをなされたのでしょうか。イエス様が御父からいただいた使命を考えてみれば、亡くなった人を生き返らせるのは、してはいけないことでした。なぜなら、イエス様は人間と同じ命を持って、同じ苦しみを受けるためにこの世に来られた方でした。できるだけ人間と同じように生き、一緒に流される気持ちで動かなくてはならないイエス様の立場だったのです。だから、十字架の道も素直に受け取られたのでしょうか。私たちと全く同じ痛みを感じられたのでしょうか。

しかし、一人息子を失った母の心を押し量られ、心を動かされたのです。イエス様の心は、逃げ場のない気持だったのでしょうか。だから、死んだ息子を生き返らせるという、奇跡という必要もない奇跡を起こして、そのみ心を表されたのでしょうか。

皆様、私たちの人生でもいろいろな難しさにぶつかります。むしろ、難しさがなければ、人生ではないのかもしれませんが。そして、天国の意味もなくなるのかもしれませんが。難しさにぶつかった時には、神様に頼ってください。切に願ってください。子どものような心で、「あなたがどのようなみ旨を持っているのか分かりませんが、私はこれを望んでいます。」と話してください。そうすれば、誰にも想像できないくらいの深い愛によって私たちは救われると私は信じます。

ありがとうございました。